

農村教化の展開について

平 元 義 雄

シャーマニズムからの脱出

封建的な農村社会および半封建的寄生地主制が支配していた戦中までの農民の悲惨な生活、その生活のなかの苦しみ、悲しみ、怒り、願ひ、しかしその厳しい封建的な支配体制の中にあっても、今日のように一切の物質的・精神的生活の末端に至るまで徹底的に組織化されている時代とはちがって、それぞれに遁れの片隅が用意されていて、そこには牧歌的な悦びもあり、農民独自のユーモラスな笑いもある、そういう時代に寺が農民に何を施し、農民は寺に何を求めたか、それを描くことは割合に簡単です。過去の資料を集め、農民社会農民の精神と構造と寺院が果して来た歴史的な役目を分析しさえすればよい。

しかし現在農村寺院の直面している教化の問題はきわめて困難な問題です。それは農村問題自体がきわめて複雑困難であって今日の社会科学をもってしてもなお明確な研究

成果が生れていないからです。

終戦後、社会不安につれて流行のように流れ込んで行つた「おひかりさん」、本門仏立宗、靈友会、それから今なお若干の信徒をもっている創価学会、立正佼正会も、いわゆる貧、病、争、災の切実な問題と取り組んでいるものの、その姿勢は前向きで、歴史を前進させるものだと考えられません。それどころか、現代社会の一環としての農村の構造的矛盾——日米独占資本と零細農耕との矛盾——から生起する諸問題を如実に見きわめようとせず、シャーマン的な信仰とすりかえるならば、真実を見る目をふさぎ、むしろ歴史を逆転させるものだといわざるをえません。

しかしシャーマニズムに関しては、本宗自体についても同様のことが云えます。元来、寺院がその本来の教化活動を著しく歪曲局限されたのは封建治下であり、明治以降の

見せかけの信教の自由の下に、実は一層の制肘が加えられ従来寺院が果しておった一切の社会的機能が剝脱され、寺はわづかに檀家制度の上にあぐらをかき、死者儀礼とシャーマニズムとがその主要な任務として残されました。これでは、もはや阿片の役にも立ちません。吹けども踊らないのは当然すぎるほど当然です。

宗祖のメトドロギーに学べば

釈尊の出発点は、人生の苦悩の現実でした。宗祖の場合にもっと具体的な「天変、地天、飢饉、疫癘」に苦しむ封建社会への転換期の激動に翻弄される民衆の生活の現実でした。釈尊は人間の苦しみは、何によって起るかその根源を求められたように、宗祖は鎌倉民衆の苦悩の根源を求め、「二十余年が間、鎌倉・京・叡山・園城寺・高野・天王寺等の国々寺々あらあら習ひ回」られたはづです。

農村教化の出発点は、あくまでも農村生活の現実です。ここではもはや封建の残滓さえほとんどとどめてはおりません。

もちろん、人生は万事、相依相関の関係にあるものですから、死者儀礼とシャーマニズムが、「一念三千」や「久遠のいのち」や「即身成仏」や「穢土即浄土」につながらないことはありません。

しかし現代の農村社会では、封建治下に歪曲、局限された宗教活動を伝統として固執することに何ほどの価値があるか反省する必要があります。「辻説法」の本質は「街頭布教」のことではなくて、民衆の苦悩の中に飛び込みそれを救うことではなかったでしょうか。

教化の原点としての農民の苦悩

農家は今、テレビや電気洗濯機や冷蔵庫や自家用車までもち、農業を機械化させ、文化住宅を建て、子どもを高校にやり、大学に入れることも珍らしくなくなり、嫁入仕度には百万円もかけたりしますので、一見過去の農村の貧困は昔語りのように見えます。しかし現実には、農村は急激に解体分化しつつづけています。秋田県は、北海道、新潟に次ぐ米産県ですが、昭和三十一年の人口一三五万をピークに毎年減りつづけ、四十三年現在一二五万に減っています。昭和六十年には農業就職人口は、今の半分の一三万にへるだろうといわれています。いわゆる人口の地入り現象です。

米どころの秋田で農業だけでは、くらしえない兼業農家が八八%を占め、出かせぎのカネで高い農機具や肥料や農薬を買って米づくりをつづけている農家がグンとふえ、県農協の貸出はこの九月末には予金を四〇%も超過してパンク

の危機が警告されました。

「人さらい旋風」で青年は村にいつかず、嫁飢饉。子ども
の出生率がたがたと落ち、春は小鳥さえ来ず、風光明媚
を誇る田沢湖は魚一匹住まない死湖と化しています。

たしかにものが豊富で繁栄していると信じている農民は
たくさんいます。しかし、その背景の核戦争の脅威、イン
フレの進行、倒産、公害、交通禍、凶悪犯罪、黒い霧、大
学紛争、親子の断絶、エロ・グロの氾濫との関連において
農村の急速な解体、分化の表情を考えるならば、譬論品の
ちみも、うり、ふうの跋扈と大火猛焰の中で嬉戯に貪樂する迷
える子らを彷彿させられます。

寺はこういう農村の危機の実体を明らかにし、そのよっ
て起るところの真実を明確に知らせ、この危機に、新しい
人類史を開く農民の正しい生き方を示すだけでも絶大な意
義をもちます。

一 非住職の教化体験

筆者は寺に生れ、寺に育ち、小さい頃から蟬やとんぼを
とり、魚を釣ることをたしなめられ、虫けらの命さえ尊重
することを知らされて育ったものですから、生れながらに
して反戦平和論者として育ったようなものでしたから、戦
前戦中いろいろな思い出がありますが、戦後、食うものも

着るものもなく、家のない人も多く、しかも国民の大多数
を支えていた精神がガタガタと崩れ落ち、いかに生くべき
か甚しく混乱したときに、法華経思想から来る人間尊重、
民主平和な日本再建を提唱したときには、毎週一度の講座
に百人前後の青年、婦人、文化人、各種団体指導者たちが
寺に聴講に集り、その中から各種の政党、団体、組合、事
業の新指導者たちが続々と生れ、あるいは中央に進出し、
筆者はあの混乱の五六年間は県内各学校、P、T、A、婦
人会、青年会、文化人グループ、各宗の寺々、劇場などで
講演し廻ったものです。

まだ戦争気分が抜けず、反戦平和などを説くとしげしば
なぐられそうになり、夜は石つぶてが投げこまれ、寺族の
はてにいたるまで就職の道を断たれ、新檀家の農民運動の
指導者は、ダイナマイトでその住宅が爆破されるという事
件が起ったりした時代でした。

そうしているうちに、日本的諸悪の根源ともいうべき寄
生地主制は廃止になり、平和運動も労働組合も一人立ちで
き、日本の再建復興も進み、農村を托鉢して歩いて見ると
赤貧の筆者に比べて、どこの農家もたいへん豊かになって
来ましたので、当時非住職であった筆者は、住職の連続を
ふみ、それから以後はまことに静かな僧院の生活を送って

いたのですが、農村問題との対決を迫られるならば、やはり筆者は、現実の労苦で、自己の問題の所在は勿論、その実体、それからその実体の分析のしかた、従つて生き方さえわからずにいる迷っている農民に、そういう覚醒を促すというだけでも、大きな歴史的な意味を寺はもち得るし、寺は現代の苦悩の実体とその根源と現代に生きる道とを示して行かなければならず、それがまた釈尊以来二千数百年の間、仏教圏で、たとえ権力によって著しく歪められることがあつても根強く生の価値体系を築こうとしてきた仏の本願でもあろうと思つてお答えしなければなりません。しかも筆者はそういう前歴のおかげで、洗うような赤貧の寺を、町や村の大衆の支持で自房の経済的基礎を確立することに成功しました。

出かせぎの取上げかた

大曲出稼相談所の調べでは、出かせぎ者の七〇％はヤミ取引だそうですが、ヤミでは手間が安く、契約がアイマイで、旅費も支給がなかったり、失業保険も労災保償もなくひどい目にあう人が多いので、出かせぎ者は、出かせぎに行く前に必らずそろつて寺に相談に来るように持ちかけたならば、出かせぎ者を守ることもでき、出かせぎに行かねばならない零細経営の社会的地位の自覚を促すこともでき

仏の道に生きることの意義を説明してやることもできると思ひます。

出かせぎ留守宅では、いろいろな苦勞が全部主婦の肩にかかり、主婦は身心ともに過勞となり、子どもは不良化し学校の成績は下り、社会問題化していますが、ここにも寺の役目があり、もし出稼ぎにゆかなくてもすむように政治の姿勢を正す方向に寺が活動できるならば、寺は政治姿勢ばかりではなく経済文化の根源を問いかつ培うという大きな活動範囲さえもが開らけるでしょう。

米過剰の問題

政府は、外国から多量の食糧を輸入しながら、米が過剰だと宣伝して、米の作付や買上の制限、米価のすえおきをやろうとしています。このいわゆる綜合農政は、借金をして米つくりにはげんできた農民を怒らせ、甚しい不安におとし入れていますが、はたして米は過剰かどうか世界人口の三分の一が飢え、さらにその三分の一が栄養失調におちいつているとき、その過剰米をこれらの飢えた人々に布施する方法がないものであろうか、もしないとすれば何がそれをさまたげているのか、ほんとうに農民の幸せを願うのが慈悲というものならば、寺は農民自身がそれを調べ考えることができなければ、代つて考えてやるだけ

の努力を惜しんではならないと思います。

こういうところに寺が死者儀礼やシャーマニズムから解放され、真の意味の教化の道が開られ、仏教が歴史を創造する大きな意義が生れて来るはずです。

近代化とは農民にとつて何か

「ちいちゃん、ばあちゃん、かあちゃん農業」で老人はインキョもできず、婦人には家事と育児の外に農業労働が重なり、節句休みも正月休みも農閑期もなく、働らきに働らかねばなりません。農業は機械化し、台所は電化し、町に行くにはバスや自家用車があり、家毎に電話を引いているのにどういふわけでこんなに、みんな忙しいのでしょうか。科学と技術とは一体農民のくらしにとって何なのでしょう。この問いにも答えてやりたいと思います。そこに人間の生きるといふことの本源的な問いも生れてきましよう。

もしまだ農業の近代化が、農民にレジュアを与えることになりなるとすれば、そのレジュアを本能や官能や衝動の満足とか、またはギャンブルやテレビの低俗番組に過ぎずか、それとも聖らかな、気だかい仏の道を求めることに過すか、寺はここにも大きな活動分野を見つけることができるでしょう。